

～第10回特別企画展～

開催中

「女流」文学の系譜 —継承者としての田辺聖子—

大阪樟蔭女子大学では、第10回特別企画展『「女流」文学の系譜 —継承者としての田辺聖子—』を11月23日まで開催しています。

田辺聖子が憧れ、愛し、評伝作品を書き上げた与謝野晶子・杉田久女など…。彼女たちから田辺聖子が引き継いだものは何か。また、田辺聖子が次代の作家たちに継いでいこうとするものは何なのか。田辺聖子が継承する「女流」文学の系譜をたどり、田辺聖子の魅力をお伝えできればと思います。

マスクミ関係各位さまにおかれましては、ぜひとも今回の開催について広く一般の皆様へご紹介していただき、特別企画展をご取材くださいますようお願い申し上げます。

【開催概要】

会期：2016年11月23日（水・祝）まで

開館時間：平日9：00～17：00 土曜9：00～16：00

休館日：日曜・祝日 入場料：無料

※ただし11月23日（水・祝）は開館

会場：田辺聖子文学館（大学図書館内）

東大阪市菱屋西4-2-26

お問合せ：大阪樟蔭女子大学 田辺聖子文学館

TEL：06-6723-8182 FAX：06-6723-8387

HP：<http://bungakukan.osaka-shoin.ac.jp>

【特別企画展展示資料】22点（ほかに、常設展示あり）

— 主な展示品 —

田辺聖子直筆原稿「与謝野晶子」

田辺聖子「火の牡丹」スクラップブック

田辺聖子直筆原稿「花衣ぬぐやまつわる…わが愛の杉田久女」

田辺聖子「秋灯机の上の幾山河—ゆめはるか吉屋信子—」初出誌 など



◆◆◆ギャラリートーク◆◆◆

常設展・特別企画展について当館学芸員がわかりやすく解説します。

11月11日（金）13：30～14：30 要申込・定員20名

<本リリースに関するお問合せ先>

学校法人樟蔭学園 100周年記念事業本部（担当：梶田・宮田）

TEL:06-6723-8152（直通）FAX:06-6723-8263

E-mail: 100th@osaka-shoin.ac.jp

樟蔭学園は創立100周年

100th

Anniversary in 2017

樟蔭学園 100周年記念ロゴマーク

【展示企画の意図】

田辺聖子の作家としての活動は半世紀以上にも及んでいます。そのなかで田辺聖子がライフワークとしてきたものに、「文学の継承」・「文化の継承」があります。田辺聖子は、少女時代から親しんできた古典文学を次代に継承すべく古典の現代語訳や古典素材の新作を発表し、近代文学界において活躍した女性文学者である樋口一葉や与謝野晶子・杉田久女・吉屋信子らについて書いてきました。彼女が「夢見小説」と名付ける〈ハイミス〉の恋愛小説や中年夫婦を主人公とする〈市井の人々〉の日常を描いた小説の数々は、文学界では見落とされがちであった女性文化や庶民文化をいきいきと伝えています。また一方で、次代の女性作家たちと積極的に交流し、文学賞選考委員として発表した的確で愛情あふれる選評には定評があります。『田辺聖子全集』の編集に尽力した近現代文学研究者の菅聡子氏は、このような田辺聖子とその文学を評して「連綿と続く「女手」の文学の正統な継承者として、田辺聖子はある」（菅「〈ただごと〉こそ文学の真髄—田辺聖子はかく語りき」〈田辺聖子『われにやさしき人多かりき 私の文学人生』2011）と、戦後文学史上に田辺聖子（田辺文学）を位置付けています。

第10回特別企画展では、こうした田辺聖子の「継承者」としての側面に着目し、「女流」文学の系譜—継承者としての田辺聖子—と題して、田辺聖子が上梓した「女流」文学者たちの評伝作品を取り上げます。田辺聖子が、「女流」文学の先人たちから何を学び、そして、次代の作家たちや読者たちに何を伝えようとしたのか。本展がそれらに思いを馳せるきっかけとなれば幸いです。

Pick Up



田辺聖子「明治百年「炎の女性像」与謝野晶子 火の牡丹」スクラップブック

新聞連載（『山陽新聞』夕刊 1968年1月4日～3月13日など、全60回）された評伝作品のスクラップブック。田辺聖子はこの作品で「晶子のラフスケッチを得て、晶子の詩業の光輝に、私はすっかり心を奪われた。何という偉才であろうと畏敬した」と述べている。本作は単行本化されていないが、のちに刊行される『千すじの黒髪』（1972年）の原型となった。このスクラップブックには随所に書き込みがあり、『千すじの黒髪』執筆に向けて推敲が重ねられたことがうかがえる。



田辺聖子『花衣ぬぐやまつわる…… わが愛の杉田久女』製本直筆原稿

田辺聖子が5年あまりの歳月を費やして上梓した女流俳人杉田久女の長篇評伝小説『花衣ぬぐやまつわる…… わが愛の杉田久女』（1987年）の直筆原稿。執筆当時田辺聖子は人気流行作家として多忙を極めており、異例の書き下ろし長篇小説と言える。「悪女説」「悪妻説」が定着していた杉田久女を、詳細な資料調査によって再評価した作品である。